

(円卓会議第2期第6回趣旨文)

社会科学の発展を考える円卓会議委員 各位

第2期・第6回会議「社会との共創を考える」のご案内(趣旨文)

一橋大学長 中野 聡

委員各位には平素より一橋大学に対して多大のご厚誼を賜り深く感謝申し上げます。

委員各位のご協力の下に「産官学のすべての英知を結集して日本の社会科学を発展させるための方策を構想していく場」として2018年に設置された「社会科学の発展を考える円卓会議」は、これまで2期・5回にわたり開催され、日本の社会科学の国際競争力強化に向けた課題として人材育成、研究、財政基盤とガバナンスをめぐる問題をそれぞれ検討し(第1期・第1回～第3回)、さらにこれからの時代における社会科学に求められている新しい課題としてデータサイエンス、EBPM、文理共創をめぐる課題を検討してきました(第2期・第4～5回)。これら円卓会議のご議論から、会議を主催する一橋大学は、指定国立大学法人構想を着想・構築し、2019年の指定後は構想を実現していく上で、かけがえのない貴重なご示唆をいただいております。改めて感謝申し上げます。

国立大学における第4期中期目標期間(2022～2027年度)に向けて2019年に文科省が発表した「国立大学改革方針」では、「知と人材が集約され」、「全国に戦略的に配置」されていることを強みとする国立大学が、国連2030アジェンダが掲げたSDGs(持続可能な開発目標)の達成など、目指すべき社会の実現に向けた「社会変革の原動力」となり、また「地方創生に貢献」しなければならないという考え方が示されています。もとより「知と人材」の拠点である大学が果たさなければならない役割は国公立の別を問いません。またそのような役割を果たすためには、大学は、狭い意味での教育・研究を超えて、共同の目的に向けて社会と共創する営みを広げていかなければなりません。そこで、来る2022年2月に開催する第2期の最終回となる第6回会議では、「社会との共創」をテーマとして掲げ、大学と社会との共創の可能性およびそのあり方について検討したいと思います。以下、考えられるいくつかの論点を挙げておきます。

(1) 理系分野に学ぶ・文理共創課題への貢献を考える

「社会との共創」が意味し得る範囲には広がりがありますが、これをひとまず社会連携・産官学連携を目的とする個々の大学と学外のステイクホルダーによる共同事業と捉えると、受託研究・共同研究、特許権の取得、寄附講座・講義、近年急増している大学発ベンチャー

などがあげられます。様々な目的で行われる大学間連携事業も含めることができるでしょう。その取組は、これまでのところ、科学的知見・技術の社会実装を使命とする理系分野において、質量共に先行して拡大してきました。そこで、まず、理系分野の優れた取組に学び、社会科学分野においても「社会との共創」を一層広げていく可能性を検討してみたいと思います。また、前回の円卓会議でも議論したように、現在、文理共創課題に対する社会からの要請が極めて大きくなっています。そのような課題に相応しい社会連携・共同事業のあり方、社会科学分野からの貢献のあり方についてもご議論いただければ幸いです。

(2) 「経営体」としての国立大学と社会連携

とりわけ近年において国立大学が社会連携の強化を目指してきた背景としては、「知と人材」の拠点に対する社会からの要請に加えて、国立大学が「真の経営体」となるための変革の一環として、各大学の強みを生かして「社会との好循環」を確立し、その財務基盤を強化することへの期待があります。このことは同時に、大学の「運営」に専心していれば良かった時代とは異なるガバナンス上の課題をもたらします。また、これまでのところ、国立大学による社会連携の強化は、各大学個別の事業として評価されがちです。しかし、わが国や世界が直面する課題の解決に向けて「知と人材」の拠点として大学がその役割を真に果たしていくには、個々の国立大学、さらには国公私立大学の別を超えたコンソーシアム型の社会連携事業を広く起こしていくことも検討する必要があるのではないかと考えています。これらの課題についても、経験豊富な理系分野の話を伺い、委員各位に自由にご議論いただければ幸いです。

(3) これからの「社会との共創」

理系大学とは質量ともに異なるとはいえ、一橋大学もまた、一橋大学コラボレーション・センター、同知識共創機構による人材育成の強みを生かした諸事業、産業技術総合研究所との包括連携協定に基づく文理融合研究教育の推進、社会科学高等研究院医療政策・経済研究センターと自治体等との連携、四大学連合によるポストコロナ社会研究コンソーシアムなど、社会科学の総合大学としての特性をふまえつつ、近年において「社会との共創」に向けた多様な取組を展開してきました。円卓会議では、一つの事例として、これら本学の取組も紹介の上、これからの社会科学分野あるいは文理融合分野において我が国の大学が「社会との共創」の領域を一層広げていく可能性についてご議論いただければ幸いです。また、これらの論点に加えて、応用研究分野に傾きがちな社会連携事業と、それらとは直ちに馴染まない基礎研究をはじめとする学術研究領域との関係・バランスを大学としてどのように考え、コントロールするかなど、「社会との共創」をめぐるこれから考えていくべき諸課題に関して、活発な議論と問題提起が行われることに期待したいと思います。

以上の問題意識を念頭において、来る円卓会議では、まず、ゲストスピーカーとして社会連携・産官学連携事業の先進的取組を展開する東京工業大学の益一哉学長をお招きして、同大学が展開する「未来社会 DESIGN 機構」や大型の産学連携事業の取組について、また、

益先生が思い描く All Japan 産学連携に向けたアイデアなどについて自由に語っていただきたいと思います。次に一橋大学からは、社会科学高等研究院医療政策・経済研究センター長の佐藤主光経済学研究科教授および社会連携担当の大月康弘理事・副学長より、本学の「社会との共創」の近年における主要な取組のひとつである医療政策・経済研究センターの活動を紹介させていただきますとともに、一橋大学の社会連携事業全般の現在と将来像について紹介させていただきます。

委員各位には各報告をふまえて、日本の社会科学が、また各大学が「社会との共創」において進むべき道について自由闊達にご討議いただきたく存じます。私ども一橋大学も、円卓会議での議論を、社会連携事業の強化にむけて進むべき道について考え、具体化していくうえで大きな契機にしていきたいと考えております。

重ねて、委員各位の円卓会議へのご協力に深く御礼申し上げます。当日の議論をおおいに楽しみにさせていただきます。